



Production Report

エルヴィス・プレスリー

Text: Paul Tingen
Translation: Takuto Kaneko

エルヴィスの当時の録音を使った壮大なプロジェクトを 作品にかかわった重要人物たちが振り返る

オリジナルのエルヴィス・プレスリーの音源に新しくオーケストラをオーバーダブして新たにリリースされた「イフ・アイ・キャン・ドリーム:エルヴィス・プレスリー・ウィズ・ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団」。こういったアイデアは、賛否両論あるのが普通だ。しかし批評家やエルヴィスのファンはこの作品を“エルヴィス80歳の最高のプレゼント”と賞賛しており、セールスの面でもイギリスではミリオンを突破、オーストラリアではプラチナ・ディスクを獲得している。一体どうやってこの芸術的にも道徳的にも疑問符が付きそうなアイデアが大きな成功を収めることができたのだろうか？それはこの作品の持つ素晴らしいテイストもさることながら、クリエイターたちの最高のスキルと、エルヴィスとつながりを持つ人物の貢献が大きい。ここでは、プロデューサーのドン・リードマン、イギリス人エンジニアリック、アビー・ロード・スタジオのエンジニアリング・ディレクター、ピーター・コビン、フリーランスでエンジニア、カースティ・ウェリーの証言から、本作の制作過程を振り返っていこう。

新しいサウンドの共存する方法が このプロジェクトの成功の要素だった

アルバムの収録曲「イフ・アイ・キャン・ドリーム(明日への願い)」を聴けば、率直に壮大なスペクタクルを感じることができるだろう。エルヴィスの声は、1972年ではなくまるで昨日レコーディングしたかのように生き生きとしている。そしてバンドとオーケストラはそのボーカルを完璧にサポートし、古さと新しさがスムーズにブレンドされている。過去のサウンドへのオマージュとともに、エルヴィスを完全に現代のサウンドへと昇華しているのだ。

エルヴィスの前妻であるプリシラ・プレスリーのこの作品への参加は広く知られているが、実際にこの作品を作

る原動力となったのはドン・リードマンだ。

「エルヴィスと個人的に

仲が良かった」とリードマンは

エルヴィスが歌うための新

チームに所属していま

適切にエルヴィスに

ヴィンセント・プラシタ

曲の制作に

で

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ

フ